

1. 実施概要

(1) 日時：平成24年10月22日（月） 14:00～16:30

(2) 場所：諫早観光ホテル道具屋

(3) テーマ：「まちの魅力向上に向けた取組」

(4) 進行

14:00～14:05 開会

- ・開会の挨拶 諫早市長 宮本 明雄

14:05～14:20 基調講演

- ・財団法人ながさき地域政策研究所常務理事 菊森 淳文

14:20～14:30 国からの施策紹介

- ・内閣府地域活性化推進室次長 横山典弘

14:30～15:25 参加市からの事例紹介

- ・飯塚市長 齊藤 守史
- ・小城市長 江里口 秀次
- ・大村市長 松本 崇
- ・諫早市長 宮本 明雄

休憩（10分）

15:35～16:25 パネルディスカッション

- ・コーディネーター：独立行政法人中小企業基盤整備機構九州本部 岡本 真司
- ・パネラー：上記市長4名、菊森 淳文

16:25～16:30 閉会

- ・閉会の挨拶 内閣府地域活性化推進室次長 横山典弘

2. 開会の挨拶

- 本日はこのような貴重な機会を設けていただいたことに御礼申し上げたい。人口減少、高齢化社会、モータリゼーションの進展や郊外大型店舗の進出により中心市街地が衰退している。とくに地方都市が著しく、商店街はかつてのにぎわいを失っている。
- 本市では平成20年7月に中心市街地活性化基本計画の認定をいただき、官民あわせて59の目標に取り組んでいる。新庁舎の建設などをはじめ平成26年の長崎国体の開催にあわせた競技場等の整備も進められているところだ。また九州新幹線西ルートも開業に向けて着実に建設が進められている。本日お越しいただいている飯塚市、小城市、大村市とも連携し中心市街地活性化を図ることが、西九州一帯の活性化につながるものと考えている。本シンポジウムが有意義なものとなるよう期待している。



3. 基調講演の概要

- 今から30年前、たとえば東京・大山のハッピーロード商店街や吉祥寺のサンロード商店街などの商店街は非常ににぎわっていた。ところが最近では東京ですら高齢化が進み、客層や品揃えが大きく変わってきている。長崎の商店街を見てもにぎわっているところはあるが同様の感じもある。
- 成功事例としては長浜市の黒壁があり、「一時間に人4人と犬1匹」といわれたまちから年間200万人が訪れるまちになった。第三セクターの(株)黒壁を設立し、黒壁ガラス館を作り、それ以外にも事業組織として観光物産センター「お花館」やプラチナプラザ「感響フリーマーケットガーデン」などを立ち上げた。もうひとつは高松市の丸亀商店街で、開発をデイベロッパ等にはゆだねるのではなく、当事者自ら主体性を発揮して進めたものだ。長崎県では、シルバー世代に人気がある新大工商店街、和風やモダンな商店の街並みがある長崎市中通商店街、また複合商業施設「アエルいさはや」が成功した諫早市中心市街地商店街・いさはやアエル中央商店街などがある。
- 今後の商店街の魅力向上に向けた取り組みのポイントとして、地域住民・顧客のニーズへの感度を高める、またビジョン・戦略・目標・中長期計画の策定、さらに人材(キーパーソン・リーダー)の発掘・育成といった戦略的マネジメントが必要になってくると考えられる。

4. 国からの施策紹介

- 中心市街地活性化法は平成18年に改正になったが、107の市が認定を受けている。7月に策定された再生戦略においても中心市街地活性化が重点施策のひとつとして位置付けられている。内閣府では、この中心市街地活性化の他にも構造改革特区や地域再生法などの施策と連携しながら、活性化を進めていこうとしているところである。
- 経済産業省では、中心市街地魅力発掘・創造支援事業として10億円の予算要求をしているところだ。また国土交通省でも、暮らし・にぎわい再生事業、まち再生出資業務をはじめ幅広く用意されている。「まちなか居住の推進」は新しく位置づけられた施策、また「身の丈再開発の推進」は身の丈に合った開発の補助率を高めようとするもの。総務省が行っている支援措置は2種類あって、中心市街地活性化ソフト事業と中心市街地再活性化特別対策事業(ハード事業)がある。
- また論点を深める観点から、抜本的な取組や発想の転換が必要ではないかと、問題提起したもので、資料に記しているとおりの「中心市街地への回帰と集約」もしくは「分散投資とスプレッド化の許容」、この選択が真摯に問われていると考えられる。

5. 事例紹介

(1) 飯塚市

- 筑豊炭田はかつて日本一の産出量があり、夕張などもそうだが相当なお金が筑豊に落ちていた。非常にまちは活気づいていた。それがエネルギー革命があり廃坑となり衰退していった。そういう中、1市4町が合併したが、まちなもさびれてきた。中心市街地の活性化の認定を受け進めているが、日本の人口も1億を切ろうとする中、人口減少の中でコンパクトシティが必要で、中心市街地に人が集まってもらわないといけない。
- 子育てセンターを作ったが、大変、にぎわっている。また中心市街地から5分から10分ほどにある4つの中心的病院をすべて新しく建て替えている。中心市街地には個人病院も50ほどある。高齢者の方が中心市街地に住めば安心して住めるという環境を整えていきたい。そうすれば中心市街地に子や孫が訪れ、にぎわいの向上にも繋がる。
- 健康で長生きするためには何をすればいいかということで、まちなかでスポーツ教室をやったり、歩けば何キロカロリーになりますよというような表示を掲示したりして歩くことを奨励するようにしている。
- 郊外のロードサイド店ではコミュニティが作れない。中心市街地を残していくためにも山笠などのまつりを通して地域コミュニティを残す必要がある。

(2) 小城市

- 小城市も郊外店舗の進出や商店街の高齢化が進んで後継者不足となり、シャッター通りのような状況となっていた。そんな中、平成18年に



- まちづくり三法を改正、そして平成21年に中心市街地活性化基本計画の認定を受けた。
- まず、まちの顔となる、100年以上の景観を保つ駅舎を活かした小城駅の周辺整備を2カ年計画で実行している。さらに佐賀県内第一号の都市公園として認定された歴史ある小城公園があり、ここは桜の名所100選にも選定されており、このエントランス部分の周辺整備を進めている。合併に伴い庁舎が移転し、その跡地に若者や市民の活動拠点としての交流プラザを作る計画もある。
 - 中心市街地商店街には23件の羊羹屋さんがあり、“羊羹のまちづくり”を進め、さらに有明海などの自然と城下町のまち並みを活かし、“スローライフのまちづくり”も進行させている。こういったまちづくりを通じて、次の世代につながるまちを残していきたいと考えている。

(3) 大村市

- 大村市でもモータリゼーションの発展や大型駐車場のある大規模施設の郊外出店で、消費者の行動は郊外に向かっていった。さらに消防署など公共施設も郊外へと移ったため、中心市街地の通行量は減少し、3分の1程度がシャッター商店となった。
- 平成21年に中心市街地活性化基本計画の認定を受け、住む人を増やし、新しく楽しく愛される中心市街地を目指すべく取り組んでいる。その1つが「上駅通り地区第一種中心市街地再開発事業」で、商業棟「コレモおおむら」のオープンによる、イベントの開催等を通じコミュニティの核とする考えだ。もうひとつは「本町アパート・市民交流プラザ」の事業で、これは交流施設と市営住宅を融合させた施設。高齢者のまちなか居住を推し進める事業だ。
- これらを総合して2核1モール構想とし、進めていきたい。いちばん大事なのは地元商店街の人たちの盛り上がりであり、みんなで進めるまちづくり、そしてまちづくり会社にも期待している。

(4) 諫早市

- 諫早駅は長崎駅に次いで県内2位の乗降客数があり、交通の要衝といえるまち。またソニーをはじめ製造業の工場も多いのが特徴だ。
- 中心市街地活性化は「賑わうまち」「安心して生活できるまち」「人が集うまち」をコンセプトに掲げて取り組んでいる。賑わうまちでは、永昌東町商店街や中央交流広場などを活用して、イベントやお祭りがある。安心して生活できるまちとしては、「アエル栄」のほか「歴史文化館」という施設を今建築中だ。人が集うまちとしては、諫早ゆかりの体操の内村航平選手の市民栄誉大賞授賞式を開催したり祝賀パレードを行い、驚くほど多くの人が集まった。
- また施策の中心的なものが「諫早市栄町東西街区市街地再開発事業」で、アーケードの中に高齢者住宅、保育所、さらに店舗、駐車場、分譲マンションを組み合わせた施設開発が進行中である。大店舗に頼っていたこれまでとは違ったコンセプトで進めていかななくてはと考えている。

6. パネルディスカッションの概要

《まちの魅力向上に向けた取組》

- (コーディネーター) 各市のお話を伺ったが、実はいずれも「交流、連携、コミュニティ」という共通のキーワードがあるように感じた。商業の活性化はもちろんだが、その前にこういった考え方が前提にあり、重要だと思う。
- (飯塚市長) 合併したあと、まちがひとつになるという意識を共有するには非常に時間がかかる。まず、まちに入って行きやすい環境をつくる。それとともに、冷え込んでしまった商業関係の方々に、どうやって火をつけていくかを考えないといけない。そのために知恵を出したり、支援したりしないといけない。
- (小城市長) スローライフをキーワードにしている。たとえばスローフードとして、有明の海苔、また地元のお米でつくったおにぎりならぬ“おぎにり”なども作ってPRしている。

また地元で作っている豆乳麺や具に地元農産物を使った“マジェンバ”というまぜそばを開発しB-1グランプリを目指して頑張っている。さらに、まちには700年も続くお祭りがあり、祭りはひとつのバロメーターなので、これを行政ではなく市民のみなさんが盛り上げていく、そういう本気度をどこまであげられるかが問われている。

- (大村市長) スーパーマーケットをつくっても、そこに住む人がいないとだめだろう。やはり、そこに住む人を増やす。商業施設もスーパーマーケットはやめて、新鮮な野菜や魚介類、など産直品を揃えた市場にした。これで勝負していくという思いだ。とにかくにぎわいをつくる、そして人を集めること。また空き店舗対策が不十分だったので全力で解決したい。
- (菊森理事) 商店街がただの物販だけではない、食べる楽しみとか、人間の生活につきまとうものにちゃんと対応できればにぎわいは失わない。たとえば産直などもそうで、にぎわいは保てると思う。
- (諫早市長) 交流人口を増やすとか、そこに住む人を増やすとか、そういうものが大事なんだと思う。マンション、高齢者住宅、また子育て支援センターをつくったりと、そういう流れの中に今はいる。その核をつくっていくのがこの中活の仕事。今までとはちがった再開発になる。郊外型店舗にとっても、インターネットで買い物ができるようになったら、そこまで人が出ていくかということもでてくるだろう。
- (コーディネーター) 諫早市は商店街、行政、商工会議所が非常に連携がとれているという印象があるが三位一体の理由を教えて欲しい。
- (諫早市長) 行政だけが、民間だけがいくら頑張ってもうまくいかないし、協働してやっていくのが当たり前と思う。どういう問題意識を共有していくかだと思う。
- (大村市長) 20年取り組んできたが、けっしてあきらめないということ。作るものは作ったが、そこからが重要で、空き店舗の問題や駐車場、やるべきことは多い。
- (小城市長) 後継者が少なくなっているが若手が頑張っている。若手を育てていきながら活性化を進めていきたいと思う。
- (菊森理事) コミュニティづくり、そして人材育成のチャンスをどう作るか、そしてまちづくり会社への支援や補助、この3つをとくをお願いしたい。中心市街地活性化の重要性を鑑みるとそれが大事だと考える。



7. 閉会の挨拶

- 中心市街地をめぐっては、人口減少や人材の流出などかつて直面したことのない状況となっているが、そういう中で市長様の熱い思い、厳しいご指摘もいただいた。それらを支援策などにつなげられるように頑張っていきたい。今後皆様の地域がますます活性化することを祈念して挨拶とさせていただきます。